

講義科目：時事現代用語における検定導入と その教育的効果

Educational Effectiveness of Introducing an Official Examination for Current Affairs Courses

佐野 光彦¹⁾ 植村 仁²⁾
中西 久雄²⁾ 中川万喜子²⁾

Mitsuhiko SANO, Jin UEMURA
Hisao NAKANISHI, Makiko NAKAGAWA

(要約)

神戸学院大学共通教育科目リテラシー科目群基礎思考分野に属する講義科目、時事・現代用語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにおいて、学生たちの講義への参加モチベーションを高めるために、ニュース時事能力検定を導入した。本稿の目的は、その導入の教育的効果を測ることにある。その教育的効果を測るためにアンケート調査を実施し分析した結果、本学学生の成績向上のみならず、当検定受験・当科目群の講義・他科目の講義が相互に好影響を持つこと、当検定には学習時間増加、新聞閲覧・読書の機会の増加という効果があることが判明した。今後も講義内容の充実と検定との有機的つながりを持ったチャレンジングな講義を展開して行きたい。

キーワード：時事問題、アンケート、活字離れ、リテラシー教育、ニュース時事能力検定

Key Words : Current Affairs, Questionnaire, Aliteracy, Literacy Education, Qualifying Examination of News

¹⁾ 神戸学院大学総合リハビリテーション学部講師

²⁾ 神戸学院大学共通教育機構非常勤講師

1 はじめに

江戸時代を研究している石川英輔の計算によると、幕府が雇う大工の賃金が2倍になるのに200年、そばの一杯の値段が上がるのにも200年、銭湯の料金も150年間変わらなかったそうだ。このことを考えると、江戸時代の人間は一生の間に世の中の変化というものを感じなかったことが分かる[1]。しかし、現代社会の日々の変化は目まぐるしいものがある。大学生にソ連と聞いても、そのことの意味を知らない学生たちも増えてきた。その理由は、大学入試問題で現代史があまり出題されないことが影響しているのかも知れない。今の大学生は、社会問題に関心がないともいわれている。

これらの背景もあって、神戸学院大学は共通教育機構を2007年に設立させ、リテラシー科目群として、時事・現代用語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲという講義科目を配置した。同講義の開講目的は、目まぐるしく変化する現代社会を生き抜くことができる、資格試験、就職試験や公務員試験等の様々な試験に対応できる人材の育成と専門教育分野への橋渡しであった。そして各担当者たちは、時事問題を分かりやすく解説することからスタートした。その後、メディア等でもニュースの時間以外に時事問題の番組なども生まれ、次第に若者間でも興味関心を持たれるようになってきた。そして、担当者たちは、さらに学生たちの時事問題への関心を高めるために、検定の導入を思考し、2011年より本格的に受験を奨励するようになった。そこで本稿は、検定導入によって、学生たちにどのような教育的効果が生まれたのかを検証することを目的とする。

2 ニュース時事能力検定導入（N検）の経緯

2007年よりスタートした時事現代用語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは、次のような構成になっている。時事現代用語Ⅰは、第1 Semester（1年次の前期）に、主に日本のことを中心として今起こっている出来事から現代社会を見て行く内容である。時事現代用語Ⅱは、第2 Semester（1年次後期）に配当され、主に世界で起こっている出来事を中心として現代社会を見て行く内容になっている。そして、第3 Semesterの時事現代用語Ⅲでは、Ⅰ・Ⅱを踏まえ、就職試験、資格試験に対応すべく、一般常識や時事問題の具体的な内容を選択方式の問題を作成し、学生たちに取り組みさせることからスタートした。しかし、この時事現代用語Ⅲの講義が最も講義準備が大変な科目になった。なぜなら、毎回問題を作成するには膨大な時間がかかり、労力に比していい問題を作成するのは、至難の業になっていた。そこで、担当者たちが探し当てたのが、毎日新聞社等が開発したニュース時事能力検定であった。

3 ニュース時事能力検定とは

ニュース時事能力検定は、どのようなきっかけで開発されたのであろうか。そのことを日本ニュース時事能力検定協会の内部資料から見てみる（注1）。ニュース時事能力検定（N検）が開発されたきっかけは、現代の日本の若者のニュースへの関心が低下しているという認識から始まる。新聞のニュース欄を読むかという質問に対して、71.6%（1990年）～48.5%（2006年）と低下、これに対しニュースを全く見ないが6.9%（2001年）～12.1%

(2006年)と増加傾向にある。また、20代の若者の53.3%が新聞を理解するのが難しいと感じているデータがある。つまり、若者と新聞をつなぐものがない、あるいは何かが障害となっている可能性がある。さらに若者のニュースが分からないから、新聞は読まないという負の連鎖を断ち切りたいとの思いが、同協会にはあった。

若者にとってニュースが分からないと思う背景には、何があるのか。その理由は以下のようなものが考えられる。新聞には、説明を省いている語句・表現が多い。新聞の関心事は、新しく起きたことは何かということに焦点が当てられ、全体像をとらえる視点に欠けている。新聞と学校で習う最低限の内容とにギャップが存在する。そして、そのギャップを埋める仕組みが存在しないところに問題点があった。そこで、日本ニュース時事問題検定協会は、若者の知識の発展段階に応じて、段階的に学習でき、ニュースを読み解く力を身に付けることができ、目標に向けて着実にステップアップできる基準はできないものかと考え、この検定を開発した。

ニュース時事能力検定とは、新聞やテレビのニュース報道を読み解くための「時事力」を認定するもので、「時事問題」の理解に欠かせないキーワードや、社会の仕組みや流れについての知識を1級から5級と準2級の6段階に分けて測定する唯一の試験である。各級の程度は、図1のようになっている。これを見ると、小学生から社会人までを対象としており、本学では最終的には2級取得を目指している。志願者数の推移は、2008年の約15000人から2013年には30000人を超えている。

図1 各級の程度

5級	国内を中心に、社会のルールやできごとに関心を持つ。 初めてニュースを学ぶ小学生から中学1年生程度が対象。中学校の社会科をまだ学習していないくても、小学校で学んだ社会科（特に地理）の知識・理解を生かして取り組むことができる。
4級	新聞やテレビのニュースに関心を持ち、自分の暮らしと結びつけて考えられる。 小学校高学年から中学2年生程度が対象。時事問題に自信がない高校生でも無理なくスタートできる。中学社会科の公民分野を学習していなくても、これまでに地理や歴史で学んだ知識を生かして取り組むことができる。
3級	基本的なニュースを、社会の仕組みの中に位置づけて理解できる。 中学3年生から高校生までが対象。時事問題を基礎から学びたい大学生でも無理なくスタートできる。中学社会科の公民分野で学習したことを生かして、取り組むことができる。
準2級	さまざまなニュースを、現代社会の諸問題と関連づけて理解できる。 高校生から大学生、社会人までが対象。高校公民科の「現代社会」や「政治経済」で学習したことを生かして、取り組むことができる。
2級	ニュースを批判的に読み解き、自分なりの意見を導ける。 大学生から社会人までが対象。高校生は大学入試対策として、大学生は就職活動までに到達してほしいレベル。新聞の主要なニュースの内容がおおむね理解できている。日常的に新聞を読んで内容を理解することができる。
1級	新聞や社説レベルの記事も読み解き、社会や自分の新たな課題を設定できる。

(出所) 日本ニュース時事問題検定協会の内部資料 (2013年11月7日提供)

ニュース時事能力検定の特長は、確かな出題：ジャーナリスト、学識経験者で構成されたスタッフが、今を読み解くために必要なテーマを厳選して出題している、バランスのとれたテーマ：政治、経済、暮らし、国際、社会・環境の5テーマからバランスよく出題し、総合的な時事力を測っている、目標設定：入門編の5級から難易度が最も高い1級に分かれており、受検者各自の到達目標に合わせた受検が可能であるなどである。志願者の属性

は、小中高生が64.6%、大学・短大・専門学校生が26.1%、会社員・公務員が4.2%、その他が5.1%となっている。2013年1月現在、全国250校以上の入試（大学、短大、高校）で、N検資格取得者が評価・優遇されており、このことが小中高の受験者数が多い理由となっている。また、受験者全体の87%が学校内で実施する団体受検でこの検定を受けている。本学でも2013年度の後期、11月15日に団体受検（第23回）を実施した。

以上のことを踏まえて、神戸学院大学の共通教育科目の講義科目である時事現代用語における、ニュース時事能力検定導入に見る教育的効果について考えてみる。

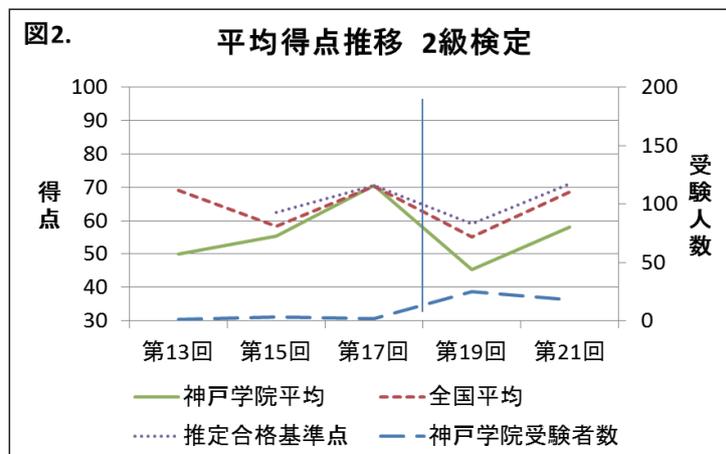
4 ニュース時事能力検定の合格率・平均得点の推移

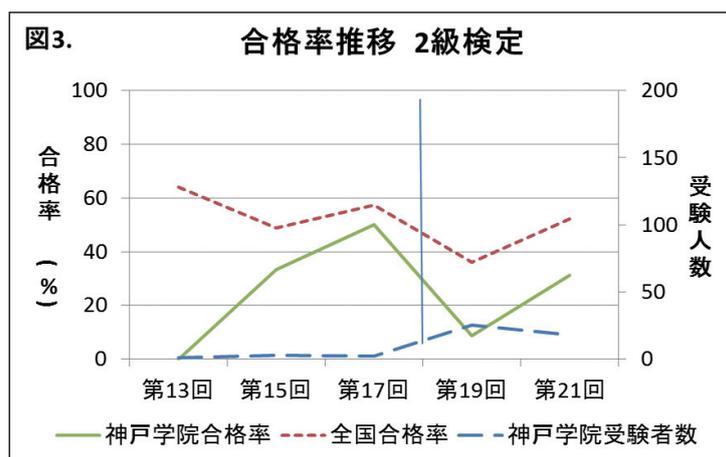
ここでは主として神戸学院生のニュース時事能力検定における合格率・平均得点の推移を示し、その特徴を導き出す。なお準2級検定は第17回検定から新設されたものであるが、第16回検定までの3級検定とほぼ同等のものであるため（注2）、本稿ではこの2つを同一視し以下双方をまとめて準2級検定と呼ぶこととする。

主な特徴の概略は以下の通り：2級検定においては全国の受験者の合格率と神戸学院生のそれが大幅に縮まる。準2級・旧3級検定において合格率は合格基準点上昇の影響を受け低下したものの神戸学院生の平均得点は若干の低下を見せるに留まる。3級・旧4級検定においては全国での合格率が下落する中、神戸学院生の合格率は上昇を始め、また合格率・得点も全国のそれに対し僅差に迫っている。

4-1 2級検定成績の推移

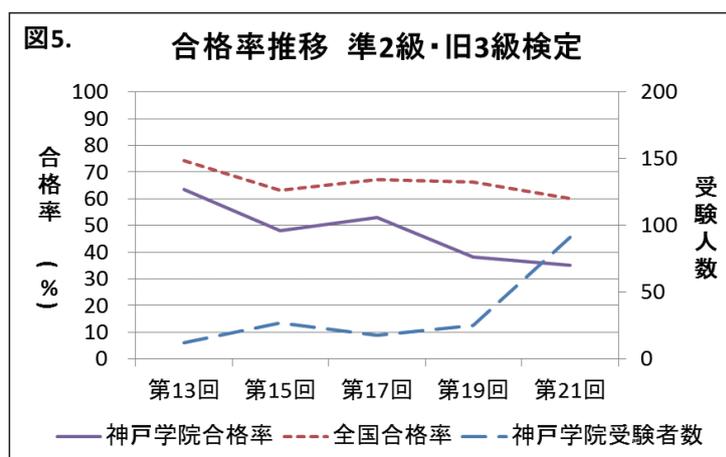
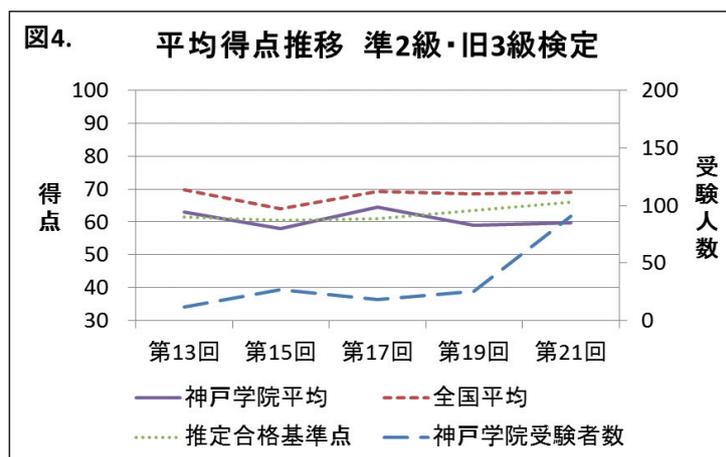
2級検定においては、下図2、3のように第13回～第17回は受験者数が僅かであるので分析から除外すると、全国平均得点と神戸学院生の得点差はほぼ一定の差を保ったまま推移している（第19回で9.9点差、第21回で10.5点差）が、合格率についてはその差の約3割（6.5%）を詰め、全国平均に近づいてゆく傾向が見られた（第19回で27.5%差、第21回で21.0%差）。





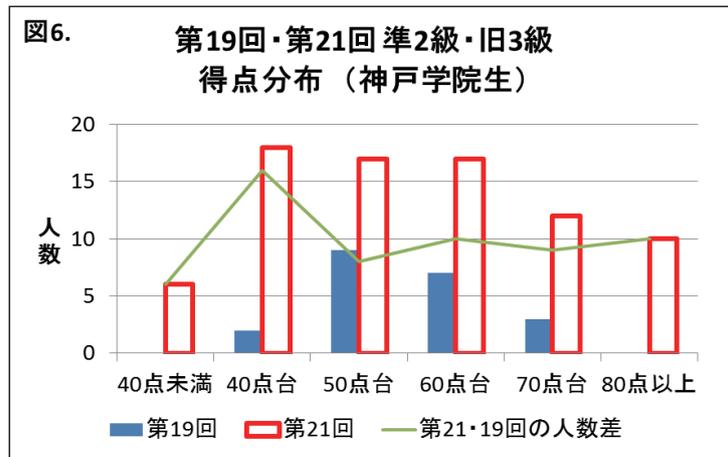
4-2 準2級・旧3級検定成績の推移

全国合格率が低下傾向にあるにも関わらず、神戸学院生の得点は第19回、第21回検定に若干の低下が見られるものの、全体としてほぼ横ばいの傾向を見せている（図4、5）。



神戸学院生の合格率推移については全国合格者の推移と乖離している部分がある（図5）。全国合格率に関しては第13回以降第21回までの奇数回は60%台を推移しているものの、神戸学院生の合格率は第19回、第21回検定で10%、15%の下落を見せている部分である。この乖離の原因は、当検定が点数のみによる合否決定をしていると仮定すると、第17

回、第19回、第21回にかけての全国合格率の緩やかな低下と、下図に見られるように60点台の得点をもつ神戸学院生の受験生が比較的多く、推定合格基準点（注3）が緩やかに上昇（61.5点から66点）しているという点にあるといえる。



補足：第21回では神戸学院生の受験者数が25名から91名まで3.64倍と急増した（図4）（注4）。得点の平均は全国・神戸学院生とも第19回からの微増となっているが神戸学院生の得点分布には変化があり、合格ボーダーライン圏の60点台が伸び、70点以上の高得点獲得者が増加し22名となる一方、50点未満の者も増加し24名となっている（図6）。

4-3 3級・旧4級検定成績の推移

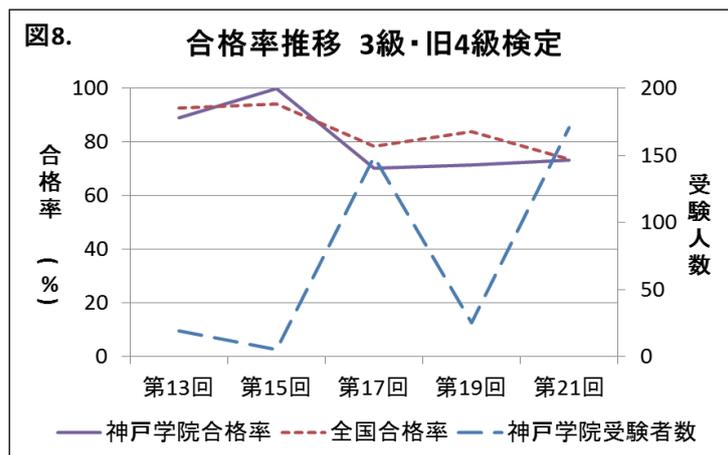
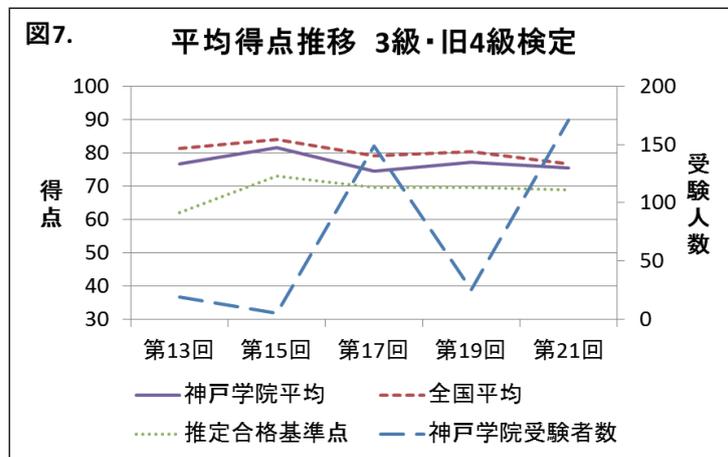


図7, 8にあるように, 全国での合格率・平均得点が下落する傾向にある中で, 合格率については神戸学院生の受験生は第19回, 第21回と合格率を伸ばしている。また, 合格率・平均得点ともに第21回では全国平均に僅差の位置まで迫り, 合格率では全国平均の73.6%に対し73.3%, 平均得点では全国平均の76.8点に対し75.6点という結果となった。

5 ニュース時事能力検定導入の教育的効果

この章では主としてアンケート(注5)結果の分析により, ニュース時事能力検定受験者, 合格者に見られる当検定の教育的効果を導き出す。その概略は, 当検定・時事現代用語Ⅱ・その他の科目の大きな相互の寄与, 当検定受験による能力・知識の伸長, 時事関連メディアへの接触促進, 課外学習時間伸長の促進である。

5-1-1 アンケート結果の分析手法

この項での分析対象となるアンケート結果は中西・植村担当の6クラス(有瀬キャンパスで開講)のものであり, 898名の回答中, 161名が当検定を受験, 107名が当検定に合格したとの回答結果となった。

当項では元データとなるアンケート回答の25項目から17項目(注6)を算出し, 当検定受験済みと回答したデータを, 回答項目間の相関関係を表すアソシエーションルール(注7)を発見するデータマイニング手法の一つ, apriori アルゴリズムにより処理した。その結果, 2013年度時事現代用語Ⅱを受講しているニュース時事能力検定受験者の特徴が100件発見されたが, そのうち興味深いものについて以下取り上げることとする。なお文中の下線部がその出力結果である。

5-1-2 当検定, 時事現代用語Ⅱ, 他科目間の相互作用

ここでは主に合格者についての当検定・当科目・他科目間の相互の影響について示す。最初にアンケートの集計データについての結果を示す。

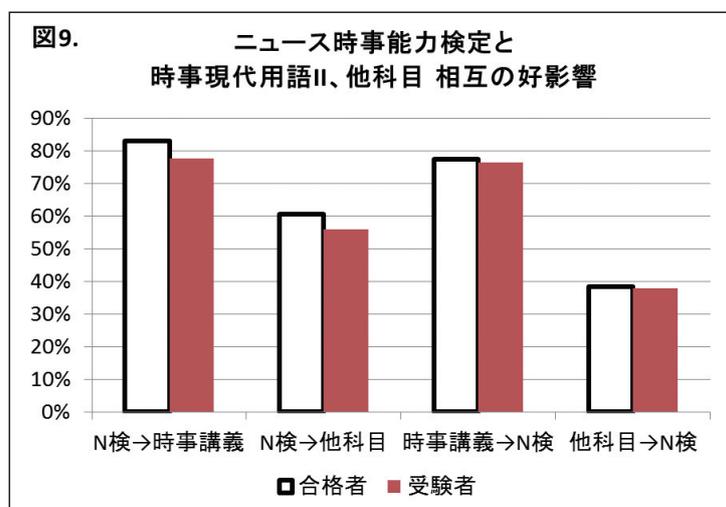


図9にあるように当検定と時事現代用語Ⅱの講義相互の影響については, 合格者・受験者の回答はともに75%を上回っており, また当検定の他科目への寄与も55%を超えており,

当検定の大学での学習への寄与が強うかがえる結果となった。これは単純な集計結果だが、実は当検定と時事現代用語Ⅱ講義との相互の寄与、他科目の当検定に対する寄与ありと回答した者は概ね当検定・時事現代用語Ⅱ講義・他科目の相互の寄与ありと回答している。以下このことを apriori アルゴリズムによる分析結果を示すことにより確認する。

・当検定と時事現代用語Ⅱは互いに好影響を持つ（約77.57%）

合格 時事現代→N検寄与 [83件] ⇒N検→時事現代寄与 [83件]

この結果の意味するところは、当検定に合格したと回答した者の内、時事現代用語Ⅱの講義が当検定受験に役立ったと回答した者83名は全員、当検定が時事現代用語Ⅱにも役立ったと回答した、ということである。107名が合格したと回答していることから、約77.57%が時事現代用語Ⅱと当検定が相互に役立ったと回答していることになる。

・当検定は他の科目への好影響をもつ（約55.14%）

合格 時事現代→N検寄与 N検→他科目寄与 [59件] ⇒N検→時事現代寄与 [59件]

この結果は当検定に合格、時事現代用語Ⅱの講義が当検定受験に役立った、と回答し、さらに当検定が時事現代用語Ⅱ以外の科目の学習に役立ったと回答した者が59名存在し、その全員が当検定が時事現代用語Ⅱの講義にも役立ったとその全員が回答した、ということである。107名が合格したと回答していることから、約55.14%の回答者が時事現代用語Ⅱの講義と当検定が相互に役立ち、当検定は他の科目への好影響をもつと回答したことになる。

また他科目が当検定受験に寄与しているという結果も得られている。35.51%の合格者が時事現代用語Ⅱの講義と当検定が相互に役立つのみならず、他科目も当検定受験に寄与すると回答している（合格 時事現代→N検寄与 他科目→N検寄与 [38件] ⇒N検→時事現代寄与 [38件]）。

さらには、当検定受験と時事現代用語Ⅱ、他科目は相互に寄与していると回答（33.64%）しており、合格者にとって当検定と大学での学習は好影響を与え合っていると見えるだろう（合格 N検→時事現代寄与 時事現代→N検寄与 他科目→N検寄与 [38件] ⇒N検→他科目寄与 [36件]）。

単に受験したと回答した者での当検定の寄与に関しては、N検→他科目寄与 [90件] ⇒N検→時事現代寄与 [84件] conf: (0.93)となっており、161名中84名の52.17%が当検定の時事現代用語Ⅱ・他科目への好影響を示している。

5-1-3 当検定の時事能力・学習成長への寄与、及び知識の伸長に関する結果

当アンケートでは当検定受験により実感した成長、伸長した知識の分野を問う複数回答可能な項目があり、これらに対する回答結果の分析を行う。

実感した成長についての選択肢は「大学での学習の励みとなった」「ニュース・時事問題への興味が増した」「ニュースを読んで意味が分かりやすくなった」「今まで興味のなかつ

た科目に興味をわいた」「社会人としての常識をある程度得た実感があった」「将来の進路を考える糧となった」「自分から進んで情報を取得する習慣がついた」「情報収集力が増した」「自学自習の習慣が身についた」であり、伸長した知識についての選択肢は「政治」「経済」「暮らし」「国際問題」「社会・環境」である。

時事現代用語Ⅱの講義と当検定が相互に役立ち、1項目で成長を感じた(42.99%)

合格 時事現代→N検寄与 成長項目数 = 1 [46件] ⇒N検→時事現代寄与 [46件]

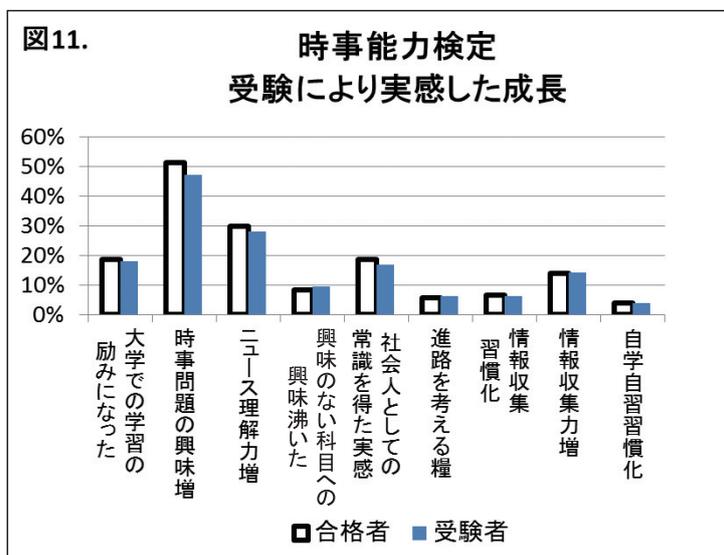
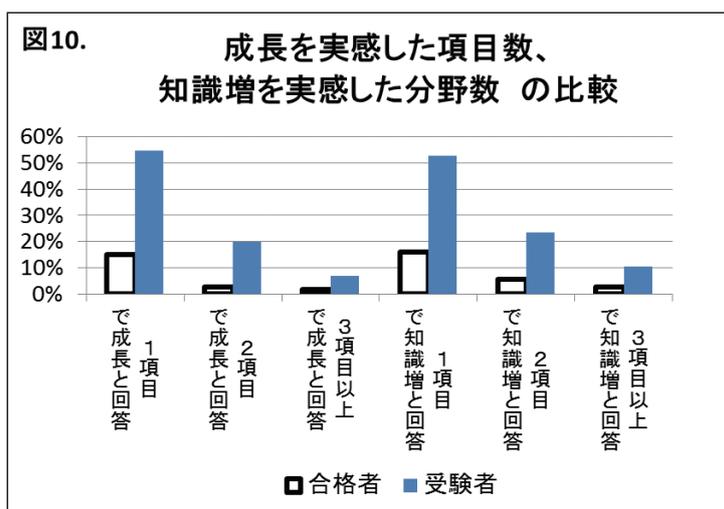
当検定が時事現代用語Ⅱ受講に役立ち、1項目で知識増加を感じた(42.99%)

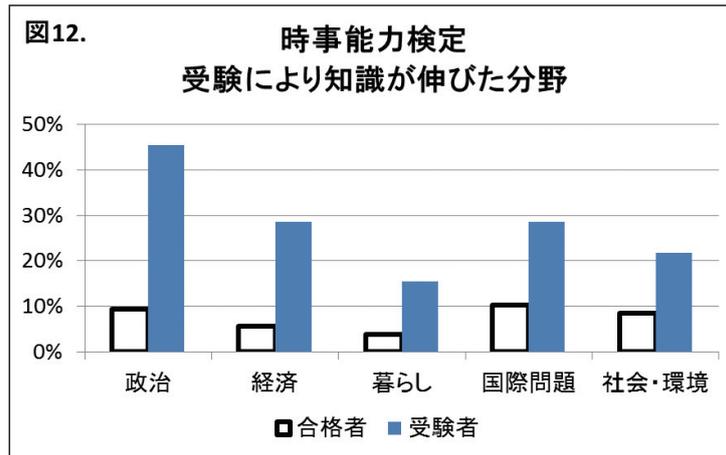
合格 N検→時事現代寄与 知識成長項目数 = 1 [46件] ⇒得意分野 = 1 [46件]

との結果が得られた。また当検定受験者の各項目に対する集計結果は図10の通りである。受験者の中に合格者が含まれているが、不合格者はより各項目に敏感に反応しており、不足した能力を当検定学習により補うことができたとの実感を得たと推測できる。

また、時事能力検定受験により実感された成長、知識が伸びた分野についての結果については、図11のようになっている。

当検定受験により時事問題への興味が増したこと、時事問題への理解力の増加が目立ち、



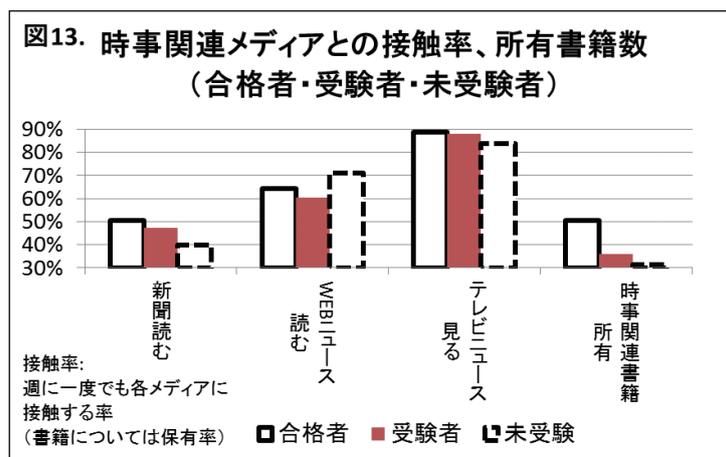


大学での学習への動機、社会人としての常識の育成、情報収集力の強化にも一定の効果があると推測される。

当検定受験によって知識の伸長が見られた分野としては政治分野が45%を超え、経済・国際問題に関する知識についても25%以上がその伸長を実感しているとの結果となった(図12)。これら3分野の知識の伸長に当検定は寄与していると推測される。

5-1-4 時事関連メディアと合格者、受験者、未受験者との関係

最後に合格者・受験者・未受験者での時事関連メディア(新聞・Webニュース・テレビニュース・時事関連書籍)との接触についての結果を示し、当検定が時事関連メディアへの接触を促していることを示す。集計結果からWebニュースの項目を除き、各メディアへの接触率は合格者、受験者、未受験者の順に下がる傾向がある。図13に見られるように合格者の半数は週に一度は新聞に目を通し、9割弱がテレビニュースを視聴していることになる。時事問題関連書籍数に関しては合格したと答えた者については顕著な特徴があり、当検定合格者の半数が書籍から時事問題の知識を得ているものと思われる。



また、以下の apriori による結果 N 検→時事現代寄与 テレビニュース頻度 = 週に3~4 [42件] ⇒時事現代→ N 検寄与 [40件] conf: (0.95) に見られるように、当検定と時事現代用語II講義との相互の寄与を認め、テレビニュースを週に3~4日視聴すると回答をした者は40名に上り、受験したと回答した者の約24.84%を占める結果となった。検定と講義

の相互に活用し、頻繁に時事問題に触れる学生が少なからず存在することを示している。

当検定と時事現代用語Ⅱ受講者の相互寄与を認める、
 N 検→時事現代寄与 時事書籍数 = 1～5 [50件] ⇒時事現代→ N 検寄与 [49件] conf: (0.98)
 という関係から、約30.43%が「受験した」「時事問題関連書籍所有」かつ検定と講義相互の寄与ありと回答していることとなる。図13に見られるように受験者の時事関連書籍所有率は30%強であるから、これは神戸学院生の当検定受験者で時事関連書籍を持つ者の大多数は検定・講義の相互の寄与を認めていると回答したことを意味する。

5-1-5 講義外での学習時間伸長への寄与

最後に補足として、当検定の講義外での学習時間伸長への寄与を示す。関連する回答結果は以下の通りである：10時間未満学習をしたと回答した者が45.34%、10～50時間と回答した者は35.40%存在し、50時間超と答えたものも4.97%である。

5-2 講義内容とアンケート結果との関連1

私が担当する時事・現代用語Ⅱでは、授業方針としている他のリベラルアーツ科目群への橋渡しを念頭に置き授業を構成してきた。具体的には、次の3つの項目を中心に授業を構成している。1つめは15回の講義のなかで時事問題を理解する上で必要であると考えられる基礎的な項目を選定し、その説明を行なっている。2つめに、前回の授業からの1週間で起きた、もしくは新聞紙面に掲載された記事を拾い、最新の時事の流れについての説明を行なっている。3つめに特に自分たちの生活に密着している記事を探し、その記事についての説明を行なっている。この3つの項目を織り交ぜながら講義を進めている。この講義スタイルはさまざまな現実や学生の反応を見ることによって到達したものである。

昨今の学生の特徴として、様々な情報をネットすなわち Web から取得する習慣があるといわれている。3クラスに行なったアンケートからもそれを伺い知ることができた。一般的に時事問題の情報収集源として代表的に挙げられるのは、Web ニュース、テレビニュース、新聞である。今回のアンケート結果によると Web ニュースについては週に3日以上読んでいるとの回答が全体の40%、2日以下との回答が53%という集計結果となった。また、テレビニュースにおいても3日以上見ると答えた学生が約60%いるという結果が出ている。そして、新聞、いわゆる活字メディアは約50%の学生が全く読まず、2日以下を加えると約80%の学生が新聞を読んでいないことがわかった。このことから、学生の時事情報の収集は、主に Web やテレビで行なわれていることが分かる。ただし、ネットメディアの特徴としてリンクをたどって情報を得るという構造を考えると、自分が興味のあるもののみについて情報収集をしている可能性が高い。したがって、新聞記事を提示し、そのことで新聞に興味をもたせることは読むという行為を深める上で有意義なことである。

また、学生から授業終了後に回収している出席カードの自由記述欄からは、ある日の講義内容について、それは高校において学習した内容であるが「詳しく知らなかった」、「言

葉としては理解していたが、実際に自分との関係がわからなかった」や「前後の歴史の流れがわからなかったが講義によって復習・詳細が理解できた」などの記述が散見される。このことから、知識としては高校や中学で学習した内容であるが、文字通り知識としてしか習得されておらず、実際の社会においてどのような意味を持つものなのか、自分たちの生活にそれはどのように影響を与えているのか、逆に、自分たちがそれにどのような影響を与えているのかについては理解されていないことがわかる。

このような、学生の Web 中心での情報収集、学習した知識の未消化を目の当たりにし、講義においては多様な情報源による資料の提示、様々な出来事の根本を学生にとって理解できるような形での説明を心掛け、より多くの学生が身のまわりのこととして時事に興味を持つことができるように心掛けている。これに加えて、ニュース時事能力検定受験を講義内で強く推奨している。ニュース時事能力検定受験に向けての前向きな意見や、受験勉強をしたことにより講義が分かりやすくなった、本講義において習得したトピックスが、他の授業でも取り上げられており分かりやすかったなどの意見が見られるようになった。

ニュース時事能力検定受験のモチベーションとなる部分に資格修得による就職対策があることも事実である。時事・現代用語の受講とニュース時事能力検定の受験勉強が、時事問題の知識に厚みをもたせて、自分の知識を広げていくおもしろさ、様々な知識がつながる楽しさを発見する一助となればさらなるニュース時事能力検定試験導入効果が得られると確信している。

5-3 講義内容とアンケート結果との関連2 - キャンパス間の比較を通じて

この節での分析対象となるアンケート結果は、中川担当の有瀬キャンパスとポートアイランド（以下、ポーアイ）キャンパス2クラスのものである。有瀬キャンパスでは、54名の回答中、5名が当検定を受験、3名が当検定に合格、ポーアイキャンパスでは、18名の回答中、1名が当検定を受験、合格したとの回答結果となった。

この節では、キャンパス間の比較を行いながら、ニュース時事能力検定（以下、N検）導入による教育的効果について見ていきたい。

有瀬キャンパスでは、法・経済・経営学部の1・2年次、人文・総合リハビリテーション・栄養学部の1～4年次が学んでおり、ポーアイキャンパスでは、法・経済・経営学部の3・4年次、薬学部の1～6年次が学んでいる。そのため、ポーアイキャンパスにおいては、今回のアンケート調査で、受講生の61.6%を占める1年生はすべてが薬学部所属であり、2年生は不在、16.7%が3年生、22.2%は法・経済・経営学部所属の4年生という構成となった。

キャンパス間での違いは、「将来希望する職種」に見られる。ポーアイキャンパスでは、「素材、食品、医薬品技術者、福祉」を希望する者が33.3%おり、次いで「営業、事務、企画系」が22.2%である。ポーアイキャンパスにおけるN検の未受験者は、94.4%にのぼる。N検を受けない理由については、「時間がない」38.9%、「興味がない」27.8%という結果となった。なお受講生の61.6%を薬学部の1年生が占めるので、少なくとも33.8%の薬学部の学生はN検に興味がないわけではなく、他の理由で受験に至らなかったと考えられる。

薬学部の学生の多くが薬剤師の資格取得を第一義としているとされているが、これは必ずしもN検への興味を否定するものではないといえる。

一方、有瀬キャンパスでの希望職種は、「営業、事務、企画系」38.9%、「講師、公務員、技能工、その他」35.2%、「サービス、販売、運輸系」20.4%となっており、N検受験者は9.3%である。受験者の3分の1は、受験する理由として「就職に有利なため」を挙げているが、逆に、受けない理由として「興味がない」40.7%、「時間がない」18.5%、「タイミングが合わない」18.5%を挙げており、時事問題に興味薄い者が多いように思われる。これは、学年別の構成が、1年生50.0%、2年生27.8%、3年生5.6%、4年生16.7%ということから、就職をまだ意識していない1～2年生(77.8%)がN検取得の必要性を感じていないのではないかと考えられる。

両キャンパスを比較していえることは、「就職」や「社会人としての常識の必要性」を意識しているか、していないかによって時事問題への関心の度合いが異なり、また将来希望する職種によって検定取得の有意性が違っているということである。今回のアンケートからは、検定導入が時事問題への関心を高めるインセンティブになっているかどうかは分からなかったが、時間を追って調査することで、現在の低い新聞の閲覧率（両キャンパスを通して、半数以上は新聞を週に1回も読まない）、ニュースの視聴率（Webニュースでも3分の1以上、テレビニュースでも2割の者が週に1回も見ない）が上昇するなどの結果が得られれば、検定導入による教育的効果がより確認できるのではないだろうか。

とはいえ、いくら新聞を読めと言っても、時事問題に興味があれば自分の気になる記事が不思議と目に飛び込んでくるものであるが、そうでなければどこから読めばいいのか分からないというのが現状であろう。そこで講義では、できる限り、講義で取り上げるテーマに関連する記事があれば、それを抜粋して紹介するようにしている。さらに、そうした記事を読む際は、黙読ではなく、誰かに声を出して音読してもらうことにしている。教室に緊張感も生まれるし、漢字の読み方をチェックできるといった副産物もある。

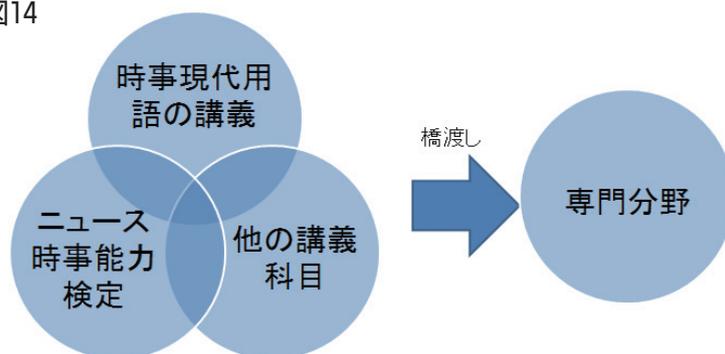
検定の受験を奨励しているため、講義内容と検定の関連性について質問されることがある。アンケートの結果では、「N検の公式テキスト・問題集を利用して受験しましたか」という問いに対して、「はい」と答えたのは、有瀬キャンパスで16.7%、ポーアイキャンパスでは0%であった。限られた回数の講義ではN検の出題範囲を網羅することは難しい。N検受験には、やはり公式テキスト・問題集を利用するのが効率的な方法だと思われる（注8）。講義では、取り上げるテーマについて、N検のテキストより詳しく、時にはもっと学術的な知識を交えた内容を心掛けている。また、1級には記述式問題もあるため、講義内で出席カードの自由記載欄を利用して記述練習も行っている。その日のテーマに関連することについて、自分の意見も交えて記述させている。なかなか内容は1級レベルには程遠いが、学習した内容を整理して自分の言葉で記述する練習は、教育的に有意義な効果が得られると思われる。

6 おわりに

2011年3月に時事現代用語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの内容を担当者たちと「学生と共につくる講義：時

事・現代用語—実践報告と今後の課題」と題して、『神戸学院大学教育開発ジャーナル』第2号に執筆した。本稿は、いわばその続編になる。現在の時事現代用語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは、4名の教員が担当している。それぞれの教員は、学生に役立つ講義をつくるため、日々努力している。担当者たちは、学生たちが時事現代用語の講義に積極的に受講するモチベーションを上げる方法の1つとして、検定試験を導入した。そこで本稿の目的は、その導入の教育的効果を測ることにあった。そのために、アンケート調査を実施し分析を行った。本学のニュース時事能力検定受験者数は、全国第2位(2013年第23回)で、受験必須としている大学を除くと全国第1位の受験者数を誇る(注9)。試験結果は、2級検定においては全国の受験者の合格率と神戸学院生のそれが、回を重ねるごとに徐々に大幅に縮まってきた。全国平均点が低下した第19回(2012年)、第21回(2013年)には同じように低下が見られたものの、本学学生の平均点は、第13回～第21回まではほぼ横ばい傾向にある。準2級・旧3級検定において合格率は合格基準点上昇の影響を受け低下したものの神戸学院生の平均得点は若干の低下を見せるに留まる。3級・旧4級検定においては全国での合格率が下落する中、神戸学院生の合格率は上昇を始め、また合格率・得点も全国のそれに対し僅差に迫っている。これらの背景には、各担当者たちが検定の重要性を訴え、学習の意欲を高めたからにはほかならない。また、アンケートから分かったことは、ニュース時事能力検定の受験をきっかけに、講義への参加意欲が上がり、ニュースをチェックする回数も増加して行く傾向にある。これに対して、時事現代用語の講義の内容がニュース時事能力検定受験準備に役立ち、さらに他の講義の内容を理解するのにも役立っている。他の講義科目も時事現代用語の講義内容を理解するのに役立ち、ニュース時事能力検定試験受験準備にも役立っている。これを図式化すると、図14になる。時事現代用語の講義、ニュース時事能力検定と他の主にリテラシー講義科目が有機的につながり、その後学習するリベラルアーツ講義科目やそれぞれの学部の専門講義科目への橋渡しとなっている可能性がある。

図14



受験をきっかけに、学生たちは学習時間を伸ばし、新聞や本を読む機会を増やしている。このように検定受験者は情報源が多様化しているのに対し、一方検定非受験者の情報源はWebに偏っていた。検定受験者たちは、時事問題にも興味関心が湧き、自分たちの成長も実感している。つまり、検定導入をきっかけとして、様々な良い作用が生まれてきている。

しかし、今後の課題は以下のようなものが考えられる。それは、理科系学部の学生に、いかにして時事問題に興味をもたせるのか、検定を受けない学生、試験日のタイミングが

合わない学生に対して、どのようなサポートができるかなどである。これまで見てきたように、検定導入によって一定の教育的効果が認められた。この講義科目は今年で7年目を迎え、担当者たちは今後も学生たちに時事問題に関心を持ってもらうために、講義内容の充実とニュース時事能力検定との有機的つながりを持ったチャレンジングな講義を展開して行きたいと考えている。担当者たちの今後の目標は、ニュース時事能力検定の受験者数を徐々に増やししながら、平均点と合格率を上げることにある。また、時事現代用語やニュース時事能力検定受験で学生たちが得た知識と学習への意欲を、第4セメスター以降もどのようにすれば継続できるのか、そしてそれを就職活動にどのように結び付けて行くのかを考えることにある。

注

- (注1) 日本ニュース時事問題検定協会の内部資料(2013年11月7日提供)。
 (注2) 同内部資料(2013年11月7日提供)。
 (注3) 神戸学院生の合格者の最低得点と不合格者の最高得点の平均値。この推定合格点は準2級の場合には誤差2点以内の正確さを持つ(得られたデータ中で合格者の最低得点と不合格者の最高得点の差が3点であるため)。補足:当検定の合格基準となる点数は公開されていない。ニュース時事能力検定公式ウェブサイトでは2級~5級は約70点程度と公表されている。
 (注4) 比較:ニュース時事能力検定は年2回(6月、11月)に実施されており、志願者数は第13回、第15回(2011年)では7550人、7672人、第17、19回(2012年)では9301人、9610人、第21回(2013年)では11131人となっており、志願者数は年に約2000人ずつ増加している。
 (注5) アンケート項目は25項目で以下の通り:学年、性別、所属学部、受験希望の当検定の級数、受験した級数、合格した級数、受験理由(選択肢:1. 就職に有利なため 2. 社会の動向を知るため 3. 情報収集力を高めるため 4. 社会人としての常識を身につけるため 5. 時事問題学習の一つの目標として、複数選択可)、受験しない理由、当検定公式テキスト・問題集を使用したか、将来希望する職種、当検定は時事現代用語受講に役立ったか、当検定は時事現代用語以外の科目の受講に役立ったか、時事現代用語受講は当検定受験に役立ったか、時事現代用語以外の科目はN検受験に役立ったか、当検定に対する合計学習時間、当検定受験により実感した成長、当検定受験により知識が伸びた分野はどれか、興味のある分野、無い分野、得意・苦手分野、週に何度新聞・Webニュース・テレビニュースに触れるか、時事問題関連書籍を読んだ冊数。
 (注6) 内訳:学部、受験級数、合格不合格、当検定の時事現代用語Ⅱ・他科目への寄与(2項目)、時事現代用語Ⅱ・他科目の当検定受験への寄与(2項目)、知識の増えた分野数、興味のある分野数、興味のない分野数、得意分野、不得意分野、何種類の成長を感じたか、新聞・Web上でのニュース・テレビニュースに接触した頻度、時事問題関連書籍を読んだ冊数。
 (注7) 同時発生する事象同士の相関関係を示すもの。条件部⇒帰結部の形をしている。これは無数に存在し、本稿では信頼度(データマイニングの分野で confidence と呼ばれるもの:条件部・結論部を含む件数/条件部を含む件数)を評価基準とし、より価値ある結果を抽出した。
 (注8) 2級~4級の検定問題の約6割は、公式テキスト・問題集から出題され、1級の検定問題については、記述式問題の約半数が公式問題集から出題されることになっている(ニュース時事能力検定公式ウェブサイトより)。
 (注9) 日本ニュース時事問題検定協会の内部資料(2013年11月7日提供)。

参考文献

- [1] 中島威夫, 吉本俊裕, 金子正弘, (2002), 石川英輔氏が語る「江戸時代の循環型社会構造と社会資本主義整備」, 国土技術政策総合研究所資料, No.80, 8.